

先進校に学ぶキャリア教育の実践

「これまで」を振り返ることで「これから」につなげ 主体的に社会に貢献できる人材を育成

— 仙台向山高校(宮城・県立) —

仙台向山高校のキャリア教育の中心である、3年間の総合的な学習の時間のプログラム「向陵プラン」。
振り返りを重視することで、自分と学問・社会とのつながりの自覚と主体的な進路選択を促す活動です。
リニューアルから5年。学校全体の取り組みとしての成果が見える今も、進化を続けています。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

- 総合的な学習の時間
- グループワーク
- 社会課題
- 事業所訪問
- 志望理由書指導
- 高大連携
- ポートフォリオ
- 進路シラバス

「なぜ大学に行くか」を考える 総合的な学習の時間プログラム

将来の目標について「教師になりたい」「看護師になりたい」と職業名をあげる生徒がいたら、「しっかり考えているな」と安心する教員は多いのではないだろうか。しかし、宮城県仙台向山高校では、そういう生徒こそ注意深く指導していく対象となる。それはなぜか、何を目指してどのような指導を行っているのか、同校のキャリア教育の中身をみていきたい。まずは、現在に至る経緯からひも解く。

同校は毎年100人近い国公立大学進学者を輩出する進学校だ。かつての進路指導は受験指導がメインで、いわゆる出口指導だったという。総合的な学習の時間開始を機に「向陵プラン」という名で進路学習を始めたが、進路講演会や職業人インタビューなどの単発の取り組みにとどまり、学年や教員個人によるばらつきもあった。

そんななか、進路指導部長(取材時)を務める穂積暁先生は、志望校への進学を果たした卒業生でも学問に対する関心が低く、進学後に方向転換や中途退学する者がいる実態を知る。ある教員は、希望どおりの国立大学に進学したが、在学中に自分のやりたいことと違うと気づき、別の私立大学に入り直した。

「『気づくのが遅くてすみません』と謝る卒業生を、ぼくは叱ることができませんでした。気づかなくて当然です。われわれ

れは1つでも多くの英単語を覚えさせることに一生懸命で、なぜ大学に行くか、本当に学びたいことは何かを考えさせなかったのですから。この例は氷山の一角。大学合格だけでなく、将来を見据えた指導が必要でした(穂積先生)

穂積先生ほか進路指導部の有志の教員は、自主的にプロジェクトを発足。キャリア教育指導者養成研修参加や先進校視察を参考に、向陵プランを進学後まで見据えた3年間の体系的なプログラムに再構築し、2009年度から実施している。

目標は職業に就くことではなく その職業を通じて何をしたいか

新・向陵プランの大きな目標は、「社会に貢献できる人材」を育成すること。そのためプログラムでは「つながる3年間」という大テーマのもと、学年別テーマに基づいてそれぞれの観点から社会貢献の方策を考えていく(図1)。

1学年のテーマは「社会とつながる」だ。自己理解から入る進路学習も多いが、同校はまず社会にある困難を知ることから始める。「自分自身は社会との接点に照らすことで見えてくるもの。そうした経験もなく内面を振り返ったところ、深いものは出てこないのでは(穂積先生)という考えからだ。

活動はクラスを横断したグループ単位が中心となる。生徒は関心のある社会問題ごとに12分野に分かれ、さらにその中



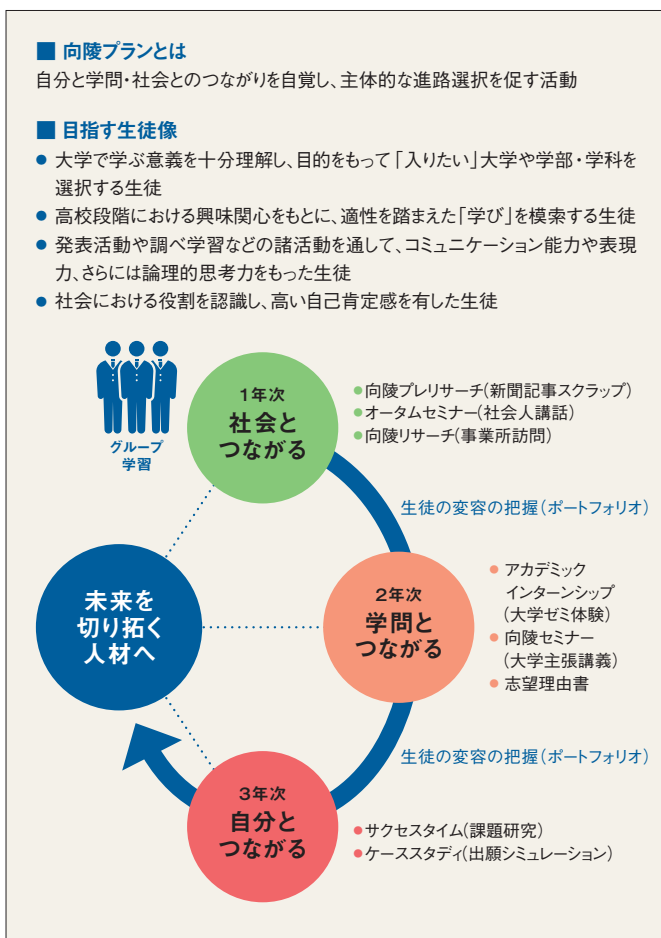
School Data

普通科・理数科 / 1975年設立
 / 生徒数 599人(男子330人・女子269人)
 進路状況(2014年度実績) 大学86.0%
 専門学校等0.5%・進学準備13.5%
 宮城県仙台市太白区八木山緑町1-1
 TEL 022-262-4130
 URL <http://mukaiyama.myswan.ne.jp/>

Outline

校訓は「自律・和敬」。制服はなく、生徒の自覚と責任を重んじる校風。生徒の多くは大学進学を希望し、そのうち4割程度が国公立大学に進学する。大学合格だけを目的とせず、総合的な学習の時間で展開する独自のキャリア教育プログラム「向陵プラン」を中心として、授業を含む日常においてもキャリア教育の推進を図っている。2011年度「キャリア教育優良学校」として文部科学大臣表彰。

図1 向陵プラン「つながる3年間」概念図



で3〜5人程度の小グループを編成(図2)。各分野には担当教員が2人ずつつく。主な活動をあげていくと、春から夏休みにかけては、新聞記事スクラップからグループ調査を行う「向陵プレリサーチ」を実施する。秋には、社会に対する貢献意識の強い職業人約30人を招いて「オータムセミナー」を開催。生徒は職業人を1人選び、職業を通じてどう社会貢献しているかを聞く。

1学年で最大の活動は、秋〜冬に行う事業所訪問「向陵リサーチ」だ。生徒自ら訪問先を探し、アポイントメントをとって訪問。単に仕事内容を調べるのではなく、「社会問題解決の手段としての仕事」という観点から調査する。

このように「社会」に目を向ける取り組みでも、主眼は「職業」ではない。とかく「夢」職業」ととらえがちだが、職業名よりもその職業を通じて「何がしたいか」を重視しているのだ。職業に就くことがゴールではないし、「何をしたいか」から考えることで多様な職業に目を向けることができる。ある薬剤師志望の生徒は、保護者が許可する「薬学部進学なら国立大学のみ」という条件を満たす成績でなく悩んでいたが、「副作用に苦しむ人を助きたい」という志を自覚したことで、志望分野を応用化学にも広げて進路実現を果たしたという。進路指導部副部長の作問偉也先生はこう話す。

「目標に職業名をあげる生徒には、あえ

図2 1学年の社会問題別グループの例

分野	グループのテーマ(関心のある社会問題)	向陵リサーチ訪問先
国際協力	国による貧富の差	JICA東北
町づくり	被災地の現状と復興	仙台市役所震災復興室
地域経済	TPP	東北大学
少年犯罪	サイバー犯罪	宮城県警
教育	いじめ、体罰、不登校、学習指導要領	私立中学校2校
科学技術	将来の電力構想	東北電力仙台営業所
医療	医師不足	健康管理センター

2学年の目玉は、同校が考案した「アカデミックインターンシップ」。オープンキャンパスのような非日常ではなく、日常の大学を知ろうという活動だ。事前学

2学年のテーマは「学問とつながる」だ。今度は学問の観点から社会問題を見つめ直し、その解決に必要な知識や技術を獲得する方法について考えていく。やはりグループ単位の活動が主になるが、「経済」「機械工学」など学問分野の切り口で再編する。

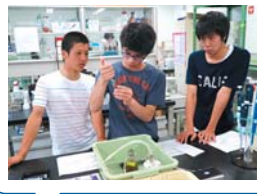
今の学習姿勢にも影響する「日常の大学」の体験

「なぜ」を問うことが大切。特に、いつも同じ職業を口にする生徒は、その職業で何をしたいかまで考える機会をもたないままになっている可能性がある。注意識く対応しています」

Voice

アカデミックインターンシップ参加の感想

- 看護学を活かす場は病院などの施設だけではなく、地域と密接にかかわっていることを知ることができました。
- 建築系にも材料やデザインといったさまざまな分野があって驚きました。選択の幅が広がりました。
- 機械工学は自分のやりたいことと少し違うかもと思った。
- とても活き活きと説明してくださる先輩方を見て、私もそんな大学生になりたいと思いました。
- 現役大学院生の方々にいろいろ質問してみても、大学生活がとても大変だということがわかりました。しかし、大学生生活の楽しさもわかったので、大学を具体的に考えることができるようになりました。
- 自分で成し遂げる力が必要だと思いました。今回発表してくださった大学生の方も、自分でアポをとって、自分で話をしに行き、自分でまとめて、すべて自分の力でやっていました。
- 実験後の考察も、高校より高いレベルで、大学生になるには高校の内容をしっかり学習しなければいけないと思いました。
- 大学で学ぶ4年間は自分の好きなことを深められるいい機会なのに、何となく過ごすのはもったいないと思いました。
- 学問分野に関する問題意識が大切だと感じました。大学は学んだことから、さらに自分で研究を深めていくところだから、何がしたいかが明確になっていないといけないと思いました。



習として学部・学科調べを実施したうえで、夏休みに3日間連携大学へ。講義のほか、ゼミ活動、卒業論文中間報告会、実験・実習、フィールドワークなどに参加し、「日常的な研究活動」を体験する。

7年間を見通した高大連携の新しい形であるアカデミックインターンシップは、最初はなかなか理解されなかったが、連携大学は年々増加。4年めとなる14年度は宮城県、岩手県、山形県の11大学21学部と連携した。さらに15年度は岩手県の高校も加わる予定で、複数大学と複数高校の連携に拡大しつつある。

アカデミックインターンシップが生徒に与えるインパクトは大きい（Voice）。具

体的なイメージをつかんで希望進路を明確にする生徒もいれば、現実を知って方向転換する生徒もいる。

また、今の勉強の重要性に気づく生徒も少なくない。留学生を交えて資料も議論もすべて英語で行うゼミ活動に参加した体験や、大学の先生から「高校の化学でやっているはず」という前提で説明されてチンプンカンプンだった体験が、高校の勉強の大切さを痛感させ、学習意欲をかきたてている。「いつも居眠りしていた生徒が、アカデミックインターンシップ後は授業を真剣に聞いている」といった例がいくつもあがる。

「来月の定期テストのためではなく、これからの自分を支えるものとして勉強をとらえるようになったということ。そんな生徒に、『これは入試に出るから覚えるよ』と受験外圧に乗る手は通用しません。われわれ教員も心して学ぶ意味を考えて授業をしないとけなくなりました」（穂積先生）

秋に実施する、推薦入試等を模した「志望理由書」の作成は、向陵プランの山場だ（図3）。各自が関心をもつ社会問題について学べる進学先を調べ、現時点での志望校および学部・学科を焦点化。2年間の活動を振り返りながら、「なぜ〇〇を志望するか」を考え、同校オリジナルの「志望理由書」にまとめる。担任はクラスの生徒全員と面談し、「なぜこう書いたの？」「なぜこゝは書けないのだろう？」と考えを深める支援をする。

狭めがちな選択肢を複線化し 生徒の可能性を広げる

3学年は「自分とつながる」をテーマに掲げ、自分の将来像を適性や能力をふまえて改めて見直し、その実現のための進路選択を考える。

新たに政治・経済系、環境系、医療・看護系など9分野を設定。その中で小グループを編成し、課題研究「サクセスタイル」に取り組む。希望進路に関連する題材について、調べ学習やディベートなどを通じて深め、最後はパワーポイントやポスターにまとめる。

向陵プランはアウトプットも重視しており、随所でレポート作成やプレゼンテーションを実施する。秋には全校生徒が参

図4 教員のコメントが入った「向陵生の記録」

以前は『学習の記録』だったものを、生活面、学習面、進路面それぞれを振り返りできるよう、キャリアポートフォリオとして改定

図3 「志望理由書」とその事前ワークシート「構想メモ」



進路指導部副部長
作間 偉也先生



進路指導部長(取材時)
穂積 暁先生

秋以降は出願指導を本格化させるが、これも向陵プランの延長として位置づける。各自が希望する学問分野が学べる大学・学部・学科を調べ、センター試験の得点率による出願パターンを3つ、「ケーススタディ」のワークシートに書き出す。複数パターンを考える点がこの活動のポイントだが、第1志望以外は書けない生徒も多い。担任との面談を通じて、複数の選択肢を検討していく。

「2学年の志望理由書ではいったん志望を絞り込みますが、ケーススタディでは逆

図5 改善点が書かれた「進路シラバス」



向陵プランを中心とした進路指導部主管の全活動について、「学力蓄積に関する取り組み」「進路意識高揚に関する取り組み」「指導充実に係る取り組み」の3つに分けて、目的から手法、目指す生徒の変容などが明文化されている。実践から見てきた改善点は随時メモ。翌年度に生かしている。

に広がります。「やりたいことはここでもできる」という選択肢を複数もたせることで、生徒の可能性を広げてあげたいのです(穂積先生)

ポートフォリオを材料に これまでを振り返る

「これまでの自分」を振り返り、「これからの自分」を思い描き、「今の自分」がすべきことを理解する活動——同校では3年間の向陵プランのプロセスをそう表現する。キーワードは「振り返り」。話を聞いて終わり、調べて終わりではなく、大きな活動のあとには必ず振り返りの時間を設けている。2学年の「志望理由書」はそれ自体が振り返りの作業だ。

その過程における教員の役割は大きい。向陵プランのワークシートや成果物はポートフォリオとして生徒ごとのファイルに綴じて3年分蓄積し、毎日の生活や学習の状況は冊子「向陵生の記録」に記録する(図4)。それらを通じて教員は生徒を把握。「いつも同じことを書いている」「自身の変容をあまり自覚していない」などをすくい上げ、年数回の面談や日常で生徒と話している。

「生徒は将来に漠然と不安を感じていますが、これまで何をしてきたかが、これから生きる支えになるはず。教員ができるのは過去の共有まで。未来の創造は彼らの力で行うのです。その力を養うべし」(穂積先生)

教員の温度差や 活動の形骸化を防ぐには

よく練られたプログラムも、学校全体に浸透しなかつたり、開始から年数が経つと形骸化していく例は多い。しかし、同校のキャリア教育は、全面見直しから5年経った現在も発展を続けている。

その理由の1つは、教員の目線合わせのための工夫にありそうだ。進路指導部は向陵プランを中心とした活動について、約50ページにも及ぶ詳細な「進路シラバス」を作成(図5)。大きな活動に入る前は、担当で読み合わせをする。これが学年や教員個人による差を縮め学校全体の指導レベルを押し上げている。

生徒も変わる」といわれますが、その逆が近道かもしれません(穂積先生)

このように「一定の成果をあげていても、まだプログラムは改善の余地があるという。入学する生徒も一定ではないながら、「検証もなく『前年どおりに』やるのはかえって不安(作間先生)」と、今後もプログラムを見直し続ける。

近年の大きな課題は、「〇〇大学でいい」という安全志向の生徒の増加だ。そこには主体性の不足が見てとれる。カギは教科活動にあるという。

「いかに自分の人生に主体的に取り組む『アクティブワーカー』を育てるか。そのために、総合的な学習の時間だけでなく、授業でも『アクティブラーナー』になることを促したい」(穂積先生)

授業を中心とした日常的なキャリア教育に向けて、さらに歩みを進めていく。